28　肝移植後2年7ヶ月目に膿胸，脳出血で死亡した原発性胆汁性肝硬変の一剖検例

太田　宏信・野村　邦浩・丸山　　弦
馬場　靖幸・林　　俊壱・吉田　俊明
上村　朝輝・遠藤　泰志*・石原　法子*
市田　文弘**
済生会新潟第二病院消化器科
同　病理検査科*
新潟大学第三内科**

症例は52歳，女性．1993年6月肝障害で当科入院．PBC Scheuer Ⅲ期と診断．以後UDCA内服で経過観察していたが1998年9月T. Bilは22となり，同29日信州大学にて長男をDonorに左葉をグラフトとして生体部分肝移植を施行した．術後肝障害がみられ，慢性拒絶反応を考えステロイドパルス療法を施行．肝機能はその都度改善し，臨床的には拒絶反応と思われた．2000年12月より肺膿瘍を合併．2001年4月24日脳出血で死亡した．剖検では小腸，胆管吻合部に結石と炎症を認め上行性感染であった．

29　成人生体肝移植におけるsmall-for-graftサイズミスマッチにおける高ビリルビン血症とCO-Hbとの関係

小林　　隆・佐藤　好信・平野謙一郎
山本　　智・竹石　利之・渡辺　隆興
嶋村　和彦・畠山　勝義・市田　隆文*
野本　　実*
新潟大学第一外科
同　第三内科*

【背景と目的】成人生体肝移植では，十分なグラフト重量を確保することが困難であり，過小グラフトを用いざるを得ない症例が多く，術後の高ビリルビン血症は臨床的に問題である．今回我々は，過小グラフト症例の術後総ビリルビンと，ビリルビン産生反応の副産物で，近年ガス状メディエーターとしての働きが注目されている一酸化炭素の関係について検討した．

【対象と方法】1999年3月より2001年4月までに当院で行われた成人生体部分肝移植16例をグラフト重量とレシピエント体重の比率（GV/RBW）が1.0％以上の群（A群：n＝8）と1.0％未満の群（B群：n＝8）に分け，血中総ビリルビン，動脈血中の一酸化ヘモグロビン（CO-Hb）を測定した．

【結果】術後平均総ビリルビンは第7病日から21病日でB群が有意に高値であった．総ビリルビンとCO-Hbは相関係数r＝0.81と高い相関を示した．

【考察】過小グラフト症例では過剰なshear stressによってヘムオキシゲナーゼ系が亢進し高ビリルビン血症を引き起こしている可能性が示唆された．

30　原発性胆汁性肝硬変に対する生体肝移植

竹石　利之・佐藤　好信・平野謙一郎
山本　　智・小林　　隆・渡辺　隆興
島村　和彦・畠山　勝義・市田　隆文*
野本　　実*
新潟大学第一外科
同　第三内科*

31　生体肝移植におけるドナー血門脈内反復投与の効果

山本　　智・佐藤　好信・竹石　利之
小林　　隆・渡辺　隆興・島村　和彦
畠山　勝義・市田　隆文*・野本　　実*
安保　　徹**・渡部　久実***
新潟大学第一外科
同　第三内科*
同　医動物免疫学教室**
琉球大学遺伝子実験センター***